

バリアフリーの 取り組みに高い評価

県内では初の国土交通大臣表彰を受賞

高山市が進めているバリアフリーの取り組みが国土交通大臣表彰を受賞。1月20日には表彰式が行われ、加納時男国土交通副大臣から土野市長に表彰状が手渡されました。

度々設けることなどによって、まち全体で「誰にもやさしいまちづくり」に取り組んでいることが高く評価されたものです。

これからの昔ながらの町並みを大切にしながら、官民一体でユニバーサルデザインの考え方に基づく「安全・安心・快適なバリアフリーのまちづくり」を進め、福祉観光都市としての発展を目指します。

今回の受賞は、障がい者や外国人のモニターツアーの意見を道路や公衆トイレの整備などにつなげていること、また、国のバリアフリー新法の基準よりも厳しい規定を設けた条例を制定し、民間事業者に対する独自の認定制



加納国土交通副大臣から表彰状を受け取る土野市長(右)



バリアフリーのまちづくりの一例(多言語表記看板)

問合先

都市整備課
☎35・3176

が、すでに亡くなっていました。その方のポケットに入っていたメモにそう書かれていたのです。

冬山の遭難は一刻を争う、一人でも多く助けられたらこんなにうれしい事はない、そう語るじいちゃんはいつもと少しがって、隊長の顔になっていました。

救助隊が生命がけでも、救える生命は本当に少なくて、救助が間に合わず、冷たくなった体を背おって、じいちゃんは何度も山から下りてきたそうです。じいちゃんのおかげよとした生命は、重かっただろうなあ。

今、日本では、信じられないような事件が毎日のように起きています。家族や、何の罪もない人の生命を、意味もなくうばうなんて、あまりにも人の生命が軽すぎます。都会で、人がたくさんいるのに、まるで迷子になって遭難しているように感じます。心の遭難のようです。山には山の救助隊があるように、心にも救助隊が必要なのかもしれません。山の救助隊は専門家しかありませんが、心の救助隊は、いつでも、だれでも、どこでもなれると思います。

ぼく達の通う栃尾小学校では、『心をつなぐ』を合い言葉に、相手の目を見て話を聞くこと、人につながって話すことを大切にしています。また学級では、一日に一回はだれにも話しかけるようにしています。

ぼくも学級長として、進んで声をかけています。女子には少し照れくさかったけど、一日にひと声をかけることを続けていたら、楽に話せるようになってきました。ただそれだけのことで、心はつながっていくようです。全校93人の小さな学校ですが、だからこそこのことをずっと続けて、きずなを深めていきたいです。そうすれば、心の遭難者は生まれません。ぼくも大人になったら、じいちゃんのように、救助隊に入りたいと思うけど、心の救助隊でもありたいと思います。みなさん、心が疲れてきたら、北アルプスに来てください。西穂高に焼岳、てっぺんまで登って風にふかれた時の気持ちは、言葉にできないくらい最高です。自然が大きすぎて、自分も人もアリンこのようにとてもちっぽけに思えます。でも精一杯生きていくって実感できる場所です。ぜひ来てください。

社会を 明るくする 運動

「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行の防止と、罪を犯した人たちや非行をした少年たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない明るい社会を築こうとする全国的な運動です。高山市実施委員会(高山保護区保護司会などで構成)では、「コンテストの作文募集に加えて、毎年『社会を明るくする運動』『少年の意見発表会』を開催し、地域のみなさんに小中学生の意見を聴いていただいています。